

序章

ボイラーとの出会いと
「吉嶺工業所」の創業

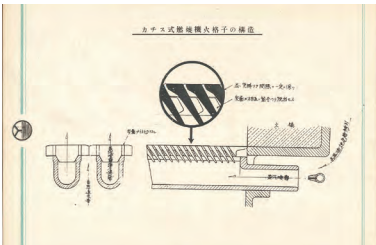
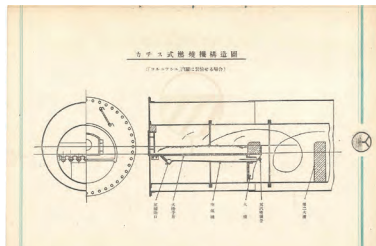
「吉嶺工業所」の創業

昭和12(1937)年4月、吉嶺一夫が個人企業「吉嶺工業所」を立ち上げた。吉嶺一夫は、後の「吉嶺汽缶工業株式会社」の社長となる一徳の兄である。

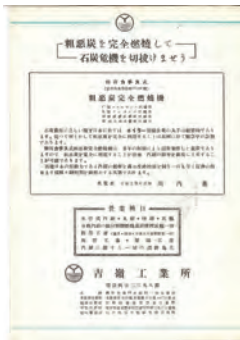
同年7月、日中戦争開始とともに戦時生産体制が強化され、尼崎は、戦前より鉄鋼業と火力発電所が集中立地する重化学工業に特化した工業地帯としての地位を確立、昭和14年、全国の火力発電所総出力の31%にもおよび、軍需生産上も重要な位置を占めていた。

昭和16年開戦の太平洋戦争にかけて戦時国家体制が強まるなか、尼崎の工業生産も軍需生産の比重を増し、大阪市の人口は昭和15年には325万人と激増、そして中国大陸の戦火は拡大の一途をたどり、市民生活は戦時体制に巻き込まれていく。

昭和20年に入ると、米軍は、市街地焼夷弾空襲においての目標を「大阪～尼崎市街地域」とし、尼崎も空襲被害を受けるようになる。特に6月1日と15日に大阪・尼崎地域を襲ったB29による空襲では大きな被害がもたらされた。



カチス式粗悪炭完全燃焼機器カタログ(吉嶺工業所)



主な田熊汽缶製造・汽車製造会社出身者と吉嶺入社年
石田義正(昭和16年)、川内 薫(昭和21年)、木田 通(昭和26年)、木田 弘(昭和21年)、桑原秀晴(昭和32年)、滝口治郎作(昭和21年)、花本英稔(昭和28年)、宮城正二郎(昭和22年)、宮本正雄(昭和21年)、吉岡利三郎(昭和35年)

終戦後の吉嶺工業所

本社: 西宮市津門大塚町149番地
名古屋出張所: 名古屋市市中村区太閤通6丁目106
延岡出張所: 宮崎県延岡市伊達3番町
水俣出張所: 熊本県葦北郡水俣町濱字河原2953番地
徳山営業所: 山口県熊毛郡麻里府村別府

昭和17年に創業者の一夫が突然病気になる、郷里の鹿児島へ戻った後他界する。一徳は、この兄の急死による運命を受け入れ、創業の志を受け継ぐ。

そして、蒸気機関は戦争のために飛躍的に発展、ボイラーは軍需産業に集中するようになる。戦時学童疎開が行われるなか、軍関係の仕事が多かった工業所の25人ほどの従業員の事務所は、空襲で狙われる尼崎を避けるように神戸市の中央区明石町ビル、江戸町ビルへと移転していった。

終戦と戦後

空襲で被災した神戸生田区の事務所から、終戦後、しばらく阪急岡本の駅前に事務所を置き、ボイラーの据付工事を続けていたが、まもなく西宮に事務所を移した。

吉嶺工業所は終戦直後から、ボイラーの据付工事と、改造用の特許カチス式粗悪炭完全燃焼機(実用新案登録33180号)を開発販売するなど、ボイラー関係の工事を続けていたが、戦時中よりひどい食糧難となっていた。新入社員だった設計の原田清茂の記録では、昭和21(1946)年5月の入社早々、姫路市外の東芝工場へボイラー据付の応援にいくが、携行品は白米何升かと調味料類が優先したとある。このようなことは「今じゃ考えられぬ頃でしたね」といい、さらに、食糧難については、当時の寮生活も3度の飯焚きに負われる始末で、副食物の買出しに夜の田舎町へ出かけても何も無く、帰路、畑に入っ

てリュックを満たしたことや、姫路の闇市で買った小さなカボチャが見事であり高価だったと思い出している。

吉嶺一徳とよしみね

“日本一の中小企業を目指す”といていた昭和44(1969)年、吉嶺一徳が、「わが社の今日までの歩みを知ること、また意義あるものと思われるので簡単に紹介しよう」と創業時のことを思い出して従業員に寄せている。



吉嶺 一徳

— 昭和44年 社長 吉嶺一徳「回想」—

昭和12(1937)年4月に兄、吉嶺一夫が創業し、20年8月までは戦時中のこととて、想像に絶する人手不足、食糧不足全般の物資不足時代であった。兵隊に行かないものは、職業手帳を持ち人間統制で勝手な転職はできない。雇入もできない、幸にしてわが社は軍関係の仕事が多かったので25人位の従業員が居た。食糧も物資も統制で金があっても闇品以外に買うことはできないし、売ることもできなかった時代だ。それに人手がないので食糧は極度に生産が少なく、米飯にいたっては、1ヶ月に2回位食べられたら良い方だった。後は肥料に使う大豆かす、いもづるなどを食べてしのんだのも私だけではない。

都会に住居するものは、こんな苦しい生活を味わっている。自由も娯楽もなく、家の中は燈火管制で憂うつなことこの上もない。19年から20年終戦までは毎日といって

良い程空襲を受け爆弾や照明弾の下で工事もあり生活もしたものだ。それで経営は利益追求どころでなく総員で生産第一主義であった。

昭和20(1945)年8月終戦となり、これから先どうなるのやらさっぱり分らず台湾の高雄に工事に行って居た人々も、各所に出張工事に行って居た人々も、みんな生れ故郷に帰りまた神戸市生田区の江戸ビルにあった事務所も空襲でやられて解散状態となった。

しかしながら民間においてまず食塩工場、食糧工場などの整備が始まり、進駐軍もやって来た。その間わが社も活動を始め一貫してボイラー関係の工事を続けた。それは20年の10月の頃からだったと思う。事務所は阪急岡本駅前であった。

その後、間もなく西宮市に移転し、そこが現在の本店所在地となっている、ここが昭和24(1949)年会社を設立した場所であり、それから今日までが、20周年になるというのである。

終戦と同時に、人間の統制はとかれ、雇入は楽であったが、食糧物資の不足は戦時中よりひどかった。特に食糧事情は大不作の年も加わり極度に悪かった。

“横浜の進駐軍の工事”などをやっていた時は、大学卒の社員が全員の食糧の闇買いに奔走した。せいぜい1日にサツマイモがリュックサックに一杯位買えたら良い方であった。それ程食べる物には苦勞をして事業をやったものだ。それを思うにつけ終戦前後共に苦勞した人々の顔が、現在会社に残っている人、やめた人にかかわらず浮んできて良かったなという感謝の気持と共に、会社の仕事で殉職した幾人かの冥福を祈らざるを得ない気持になる。

株式会社にしてからは引続き汽缶据付の下請やら中古ボイラー売買などをやったが、いずれにしても縁の下の力持ち的存在で、メーカーになるべきだとの信念のもとに西宮市から大阪に事務所を移し引続き、大阪市福島区の鷺洲に土地を求め昭和27(1952)年に事務所兼工場を建設した。下請鉄工所を使い28年には、よしみねボイラ1号機を試作試運転して売り出した。

この頃より下請的事业とは縁を切ってボイラーメーカーとなったが、新製品販売に直営工場なく、またメーカーとしての歴史なく誠に苦勞をして、28年から30年の間は給与の遅払までおこした最も苦しい年であった。

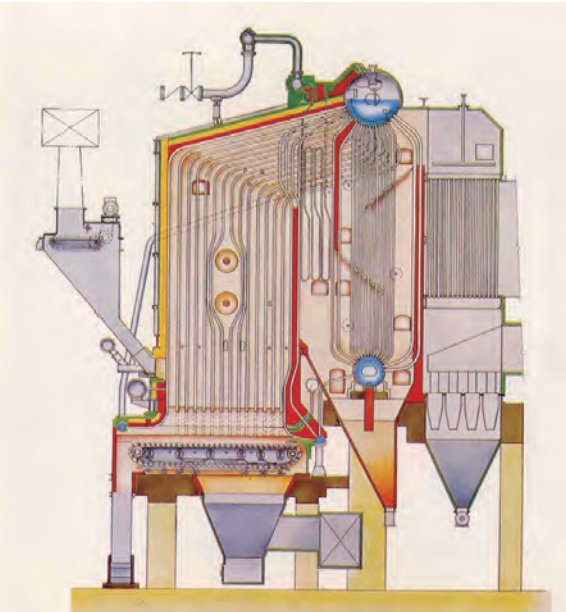
みんなが頑張り通してようやく大開工場も手に入れ直営工場を持ち、需要家各位

に「よしみねボイラ」の認識を得ることができ、ボイラーの機種および性能も年々進歩して今日にいたって居るのであるが、ここで特に述べたことは昭和27(1952)年福島に事務所を建設した時、ここは仮設的のもので良い、10年先には事務所を大阪市の中央に移し工場はどこか広い場所に近代的なものを建設する目標を立てた。

その目標に対し全員賛同し努力に努力を重ねて、丁度10年目の昭和38(1963)年には京都工場が完成し、そして事務所は現在の便利なビルに入ることができたのである。また、最も早く開設した名古屋支店はじめ東京、九州支店なども便利な場所にわが社がふさわしい事務所を持つことができて全従業員に共に喜びたえない次第である。



1号機C型ボイラのカタログ



H型ボイラ (よしみねトラベリングストーカー 1号機: 昭和51年)

—社章とカタログ—

ボイラーを象徴する汽水胴と、水平線からイニシャルのYが昇るようなイメージの社章であるが、昔はカタログが作られる度に、水平線の本数や、Yのイニシャル線の太さなどが多少違っていた。現在のロゴに確定したのは、本社を大阪北区芝田町に移した昭和39年頃からである。



社章確定 (昭和 39 年)



終戦時の社章と組織 (昭和 21 年)

—社名:よしみね—

創業者の名字に付く「嶺」の字は、奄美など南西諸島に多く見られるが、創業者の出身地鹿児島県枕崎市にも吉嶺姓が多い。枕崎は昔、鹿竈と呼ばれていたが、大正12年に枕崎町、昭和21年に枕崎市となった。奈良時代、遣唐使が日本に帰り着いた薩摩半島坊津の東隣で、黒潮で南方より薩摩半島にたどり着くところであり、琉球文化も相当身近であったようだ。吉嶺汽缶工業時代には、一徳の兄の息子、吉嶺一郎が昭和26年に入社、実弟の吉嶺維も昭和30年に入社、2人の実妹が鹿児島出身の社員と結婚するなど、「よしみね」は永く創業者家族や出身地鹿児島とのつながりを保っていた。



吉嶺一徳は子どもの時から雄大な開聞岳を眺め、自分の将来の夢を抱きながら育った。

ボイラーとの出会い

一徳は明治41(1908)年12月26日、鹿児島県薩摩半島西岸、枕崎の麓に位置する東南方村(枕崎市)で吉嶺伊三次の次男として誕生した。次男でありながら名前に一が付く。「徳が備わった者」として一番に育つように両親が願ったのだろう。

大正10年、その村の桜山尋常高等小学校に入学した。明治2年創立の小学校で、鹿児島県の公教のさきがけをつとめていた同校は、黒潮の香りのなか、真と誠との道ゆかん、敬と愛との世に生きんと校歌に詠う。よき指導者と、この小学校の校風がおそらく一徳の心骨となり原動力になったことであろう。後述するように、一徳はボイラーに関しては努力の人であった。昭和44(1969)年、大阪本町に進出したときの



社は「誠実」「努力」であり、物事を成すに誠実を以ってなし、その完遂に努力することとしている。

その後、青年の一徳に影響を与えた人物は田熊常吉氏であろう。



青年一徳 (20代)

一鹿児島の人々

薩摩の人間は、積極性と消極性、開放性と閉鎖性と、両極性を持つのが特徴といわれ、明治維新後、西郷隆盛のほか歴史に残る人物を輩出した。

明治維新後、関西への汽船航路は早くから開けていたし、鉄道も昭和6年には枕崎～伊集院が開通し、鹿児島本線が関西とつながる。後、昭和19年に関門トンネル上下が開通するなど、鉄道の発達もあり、創業者の出身地である枕崎を中心に鹿児島の多くの人々が永く吉嶺の支援者となった。

主なる鹿児島出身者(入社年)

犬童 正之(昭和27年)薩摩町、江原 一雄(昭和28年)鹿児島市、楠八重 謙吉(昭和27年)薩摩町、俵積田 洋幸(昭和36年)枕崎市、津留 与吉(昭和26年)大隅町、富山 常義(昭和26年)鹿児島市、永仮 昭義(昭和24年)鹿児島市、前 耕蔵(昭和31年)薩摩町、的場 吾朗(昭和24年)鹿児島市、山下 満義(昭和24年)鹿児島市、吉崎 良治(昭和21年)指宿市、吉嶺 一郎(昭和27年)枕崎市、吉嶺 維(昭和30年)枕崎市、吉嶺 正治(昭和26年)枕崎市、吉嶺 睦男(昭和29年)枕崎市 その他20数名

一徳が18歳で汽車製造に入ったとき、田熊常吉氏の発明品である国産第1号ボイラーが汽車製造で製作されており、このときに一徳自身も「よしみねボイラ」の名を世に残すまで頑張ろうと思ったようだ。

この時代は現代より貧しいが、人々の心は豊かだった。この頃の青年は腹一杯に食べることを願っているような生活をしているのに、不思議と人間は明るかった。そして貧しさから抜けるために勉強する。それに知識や技術習得に純粋で貪欲だった。こうした当時の風潮が一徳を研究に駆り出したのではないだろうか。

未来に何があっても耐えていく。そして学ぶことが自分を成長させるという摂理が自然に身についていた。

西薩摩からの上阪

鹿児島港は明治の大改修により近代港湾として大阪方面の定期航路が頻繁ではあったが、鹿児島に初めて鉄道が開通したのは、明治34(1901)年6月10日のことである。その後、大正2年前後には全国で鉄道路線建設が進み、幹線用の大型・高速機関車の生産も急速に進展したが、枕崎への鉄道路線は昭和6(1931)年までなかったため、一徳が小学校時代に汽車を実際に見ることは少なかっただろう。

後述するように、昭和2(1927)年に一徳が「汽車製造会社」に入社した後、昭和6(1931)年に枕崎～伊集院間の枕崎線(現在の鹿児島本線)が開通した。南薩鉄道(現在の鹿児島交通)が枕崎まで汽車製造の汽車で鉄道を開通させたのである。同時に工業の機械化により、資本家と労働者が生まれ、女工哀史などの裏面もあったが、当時の子供は鉄道と汽車に希望を見出した

のではないだろうか。

西薩摩には、その後、昭和38(1963)年、国鉄乗り入れによって枕崎～鹿児島間も開通したが、薩摩半島西側の鉄道は昭和50年代に過疎化などで次々廃止され、伊集院から枕崎を結ぶ鉄道はもう残っていない。

ボイラーへの思い

昭和2(1927)年、一徳は汽車製造会社に入社したが、会社のあった尾崎市は、工業化・都市化が一層進んでいた。なかでも、昭和3年からの築港開発(埋立地)により、発電所や鉄鋼産業などを中心とした重化学工業地帯が形成され、汽車の需要が増大、会社では汽車の研究製造が盛んとなっていた。

一徳は汽車製造では、主に日本行政権のあった南樺太にて汽缶の据付に従事した後、日英米の特許を持つ「タクマ式ボイラ」の製造、据付を担当、これがボイラーに情熱を注ぎきっかけになった。

そして、田熊常吉氏が独立設立した「田熊常吉研究所」(後の田熊汽缶製造)へ、タクマ式ボイラ発明の協力者であった滝口治郎作氏や技士の川内薫らと共に移籍、ボイラー造りに邁進するのである。

しかし、移籍した一徳は工務課長として一役を担っていたが、工作中に片目を失う事故に遭った後、退社する。



ボイラーと一徳



樺太でのボイラー据付時代

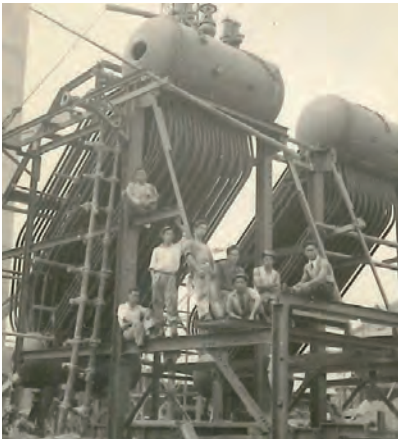


樺太でのボイラー据付

「吉嶺汽缶工業株式会社」の設立

昭和24(1949)年、「ドッジ・ライン」によるデフレ不況で国内では経営合理化の嵐が吹き荒れるなか、燃焼機や中古ボイラーの販売のほか、水管式ボイラー、丸ボイラー、立てボイラーなど各種ボイラーの据付解体修理業として「吉嶺汽缶工業株式会社」が設立された。全従業員110数名のうち、本社・支店の工事課員が75名(約7割)で、据付工事が主要業であったことがわかる。ちなみに設計が4名、製造4名、総務5名、営業14名、経理7名という体制であった。

本社: 西宮市津門大塚町149番地
名古屋出張所: 名古屋市中村区太閤通6丁目106
延岡出張所: 宮崎県延岡市伊達3番町
水俣出張所: 熊本県葦北郡水俣町濱字河原2953番地
徳山営業所: 山口県熊毛郡麻里府村別府
鹿児島連絡所: 鹿児島市高見橋



ボイラーの据付時代
保安隊(後の自衛隊) 北部方面
(昭和 26 年)



ボイラーの据付時代 (昭和 25 年)

地方(九州)での仕事状況

昭和25(1950)年に始まった朝鮮戦争は特需景気をもたらし、わが国経済はようやく復興のきざしをみせるようになった。この頃、九州で据付工事に従事していた山下満義は、後年、地方の仕事についての思い出を述べている。

「初めての現場」… 私は昭和24年10月、入社して一週間位鹿児島連絡所で雑用をしていますと、興国人絹の八代現場へ行けとの電報を受け、即日夜行で現場に行きました。現場責任者は吉崎さんです。見るも聞くもの初めてのことばかりで、籠原さん長野さんの御手伝いでチューブ締めやチューブ曲げをやりましたが足手まといで御迷惑のかけっ放しでした。社長も数回督励に來られましたが社長自ら汽車は三等の夜行列車を利用されしかも車中での見積りや仕事の打合せなどして精力的に働いて居られました。

「事務所移転」… 鹿児島連絡所移転のとき、連絡所は高見橋畔の小さな町工場の一隅を借用しての場さん(後の取締役営業本部長)が一人勤務して居られました。暫らくして高見馬場交差点の目貫通りに進出することに成りましたが、それでも間口一間半奥行き二間位の狭さでした。机一つ置いて吉嶺汽缶工業(株)鹿児島連絡所の立看板を建て一応事務所らしい形がととのいました。連絡所の移転と言っても大八車に2屯のチェンブロックと、工具箱1つそれに耐火レンガの残材が少々で二回の往復で済んだ様に記憶していますが、私が車引きで後押しは的場さんです。高見橋は石造りの太鼓(アーチ)橋で重いチェンブロックを載せて渡るのに大汗をかいたことも懐かしい思い出です。連絡所の初商売は的場さんが、山川の佐多焼酎会社に中古のランカシャボイラーを売られたことでした。

「移動事務所」… あれは、昭和25年の夏の頃だったでしょうか、マッカーサー命令で突如として警察予備隊が創設されることに成り、九州福岡では旧九州飛行機製作所跡雑餉隈(ごっしょのくま)部隊の建設が進められ、建設省の九州地建は総力で部隊設備建設に当たったことです。仕事は既設のボイラー2基の整備と言うことで、的場さんの陣頭指揮で、連日深夜まで残業は続けられました。ボイラーの水

圧テストには、給水設備が間に会わず板付警察学校の消防車を要請してボイラー室地下のピットに満水していた溜り水を吸い上げました。

当時の九州出張所はまだ事務所は無く、田熊の事務所を一応の連絡所として使わせてもらっていましたので、的場氏は何時も大きな鞆に書類、印鑑類、筆記具、そろばんなど一式詰め込んで居られました。一口に書類と言っても通信紙、日報用紙、金銭出納簿、電報用紙から封筒まで、文字通り事務用品一揃えですから鞆は何時もはち切れんばかりで、我々はこれを「移動事務所」と称していました。的場氏はこの重い鞆を下げて各現場を廻り、合間を見ては現場でこの鞆を机代りに見積りから金銭出納簿等々の事務をとって居られました。

ボイラーの据付工事時代

戦後の日本経済の復興に寄与したエネルギーは石炭であるが、日本で石炭が容易に手に入るのが北海道と九州であった。炭鉱の開発は、雇用の創出と復興の両面から活発に国策として進められ、その地域では復興源である石炭と輸送ルートとしての国鉄をフル活動させた。そしてボイラー据付現場も北海道や九州に集中している。

当時は作業員150名を擁し、月に20余台の水管式ボイラーの据付工事をこなしていた。バブコック系では、増成動力という据付会社があり、一方、タクマ系では吉嶺汽缶が主流を占めていた。鉄工は吉嶺維組、野本組、宮下組、宮城組、煉瓦工は峰雪組と、いずれ劣らぬ昔堅気の優秀な人ばかりがいて、今日の基礎が築かれた。

昭和25(1950)年からの朝鮮戦争特需によって日本経済が拡大していくなか、昭和25年に千歳キャンプ、日本ゴム札幌工場、昭和26年に陸上自衛隊北部方面総監部(札幌)、昭和27年に札幌北海道庁、恵庭保安隊(自衛隊)、国鉄苗穂工機部、島松保安隊などつねきちCDボイラーやH_Nボイラーの据付工事に従事した。

当時は皆若くて働きざかり、工事監督として、寝食を忘れて、熱心に仕事に打込んだが、下請けはつらかった。さらにコピーがない時代、貴重な図面は現場で見せてもらい、工事の工程やレンガ枚数、ボイラーの構造をその場で考えながらノートに写し、フレームの組立部品番号、数量、寸法や消耗品明細なども全て直前に確認、そして工事中にはそれぞれの作業に必要な時間を常にチェックし記録して次に備えた。水管のエキスパンダーは山根32時間、山田35時間、佐々木36時間、吉嶺30時間、ストーカー組立に宮下組10時間、水野組18時間というように記録(木田通のノート)しなければならないのだ。

ちなみにノートによると工賃は1日1,000円の原価となっている。

彼らは酒もよく飲んだので得意先の酒造会社から工事の慰労としてお酒をいただくことがあった。会社の事務所にも届けられることがあって、東洋醸造大仁工場よりもらった清酒は一升や二升ではなく四斗樽、どかつと事務室の片隅に酒樽を置いて、毎日勤務終了後、必ず一杯、赤顔で帰宅できたようだ。



ボイラーの据付時代 保安隊(昭和 27 年)